

第一回 『史記』 ― 司馬遷 「人」を描いた歴史書

令和六年六月六日 於 白根記念渋谷区郷土博物館

國學院大學文学部兼任講師 木村剛大
きむら たかひろ

本資料の構成

一、司馬遷について 二、『史記』解題 三、游侠列伝 四、まとめにかえて

余は少時好んで漢籍を学びたり。これを学ぶ事短かきにもかかはらず、文学はかくの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。『文学論』序文 明治三十九年（一九〇六）

一、司馬遷について

司馬遷しばせんの生没年・出生地については明らかではない。生年を紀元前一三五年とする説（『史記索隱』唐・司馬貞）や、紀元前一四五年とする説（『史記正義』唐・張守節）などがある。清朝の学者は多く、紀元前一四五年説を採っている。生地についても山西省とする説や陝西省とする説があるが、今、王国維（清朝の学者。一八七七―一九二七）の説に従い、陝西省としておく。

◎父・司馬談の遺言

司馬遷は父・司馬談しばたんに従い長安に暮らし、幼い時から読書を重ねた。二十歳になると、南方の江水から各地を遊歴し、黄河流域の地までを巡る大旅行に出た。このときに旧跡を探訪し、土地の風俗を考察し、各地の伝説・伝承を採集したとされる。長安に戻り、二十二歳のときに初めて出仕し、郎中ろうちゆうとなった。その後、西や南に出征し、帰朝して復命した。

司馬遷が三十六歳の時、父・司馬談は、漢の武帝が泰山たいざんに於いて自ら神を祭る、封禪ほうぜんという天子自ら執り行う儀式に付き従うことが叶わなかった。史官であるにも関わらず、留め置かれ、この儀式に参加できぬ無念さに司馬談は憤りを発し、今まさに死の間際にあった。司馬談は、息子の司馬遷に次のように遺言した。

太史公、遷の手を執りて泣いて曰く、「余の先は周室しゅうしつの太史なり。上世より嘗て功名を虞・夏あらかに顕はし、天官の事を典つかさどる。後世、中ごろ衰へ、予に絶えんか。汝復た太史と為れば、則ち吾が祖を続つげ。今天子先歳の統つを接ぎ、泰山ほうを封ず。而れども余、従行するを得ず。是れ命めいなるかな、命めいなるかな。余死

せば、汝^{なんじ}必ず太史と為^なれ。太史と為^ならば、吾^{われ}が論著せんと欲する所を忘るる無^なかれ。…今、漢興^{おこ}り、海内^{かいだい}一統し、明主・賢君・忠臣・義に死するの士あり。余太史と為^なりて論載せざんば、天下の史文を廃せん。余甚^{これ}だ焉^{おそ}を懼^{なんじ}る。汝^{なんじ}其^{おも}れ念^{おも}へよや。」と。遷^{うつへ}首^{くわい}を俯^{うつ}し涕^{なみだ}を流して曰く、「小子不敏なれども、請^{こゝろ}ふ悉^{ことごと}く先^{ついで}人の次^{ついで}づる所の旧聞^{きうぶん}を論じて、敢^あへて闕^かかじ。」と。

『史記』『太史公自序』

太史公(司馬談)は、息子・遷の手を執り涙を流しながら言った。「我が祖先は周王室の太史であつた。上代に於いて虞・夏の治世に功名を顕してから、天官の職を司つてきた。しかし、後世は道半ばで衰微し、このままでは私でこの伝統も絶えてしまふだろう。もしお前が私に続いて太史となつたならば、我が祖先の業を継げ。今、天子は千年の皇統を継いで、泰山での儀式を執り行われた。しかしながら、私は随行することが叶わなかつた。これも運命だ。運命なのだ。私が死んだら、お前はきっと太史となれ。太史となつたら、私が論じ著したいと思つていたことを忘れるな。…今や漢王朝が興つて、天下は統一され、明主・賢君・忠臣・節義に死んだ人物がいる。私が太史となりながらも論じ著さなかつたならば、天下の史文を廃絶してしまふであらう。私はこのことがひどく心配だ。お前は私のこの思いを心に留めておいてほしい。」と。司馬遷は頭を垂れて涙を流して言った。「小生は不敏な者ですが、祖先が整理された過去の出来事や伝聞をすべて論じて、遺漏のないようにしたいと存じます。」と。

父・司馬談のこの遺言が、司馬遷の『史記』執筆の大きな原動力となつたことは容易に想像される。このとき司馬遷は父のもつ「史」、史官としての誇りを継いだのである。司馬遷が三十八歳になつた年、彼は太史公に任命されると、父の遺志を継いで史料の収集を開始した。そして、武帝の親祭(天子自ら執り行う祭祀)に従うなどして、四十二歳ごろには『史記』の執筆に取りかかつていたようだ。以上、父・司馬談の遺言は、次掲の李陵^{りりやう}の禍とともに『史記』執筆を支える重大な契機であつたと考えてよいであらう。

◎李陵の禍 発憤著書の説

漢の勇将李陵^{りりやう}は、異民族である匈奴^{きよつぽ}の地に遠征したが、奮戦むなしく相手方に降つた。その後、武帝の命により李陵の一族が皆殺しにされる事件が起きた。時に司馬遷は四十八歳であつた。この李陵の事件の直前、司馬遷は李陵の人格や行動をかばつたとして断罪され、武帝の怒りに触れた。遂に司馬遷は宮刑に処せられるという悲劇に陥つた。

太史公、李陵の禍に遭ひ、縲紲に幽せらる。乃ち喟然として歎じて曰く、「是れ余の罪なるかな。是れ余の罪なるかな。身毀られて用ひられず。」と。退きて深く惟ひて曰く、「夫れ詩書の隠約なるは、其の志の思ひを遂げんと欲すればなり。昔、西伯は羑里に拘へられて周易を演じ、孔子は陳・蔡に居せられて春秋を作り、屈原は放逐せられて離騷を著し、左丘は明を失ひて厥れ國語有り、孫子は脚を膺せられて兵法を論じ、不韋は蜀に遷されて世に呂覽を伝へ、韓非は秦に囚へられて說難・孤憤あり。詩三百篇は、大抵、賢聖發憤して為に作る所なり。此れ人皆意に鬱結する所有りて、其の道を通ずるを得ざるなり。故に往事を述べて、來者を思ふ。」と。

太史公（司馬遷）は李陵を弁護したために宮刑に処せられるという禍に遭ひ、獄中に幽閉された。そこで深くため息をついて嘆いて言った。「これも私の罪なのだ。私自身の罪なのだ。身体は毀損されて世に用いられなくなってしまった。」と。（出獄の後）家にこもって深く考え込んで言った。「そもそも『詩経』や『書経』の表現が深遠で簡約なのは、作者の思いをわかってもらいたいためなのであろう。その昔、西伯（周の文王）は羑里に拘束されて『周易』を敷衍し、孔子は陳・蔡の間で危難に遭つて『春秋』を作り、屈原は追放されて「離騷」を著し、左丘は失明して『國語』を撰し、孫子は足切りの刑に処せられて兵法書を論述し、呂不韋は蜀に流されて後世に『呂覽』（呂氏春秋）を伝え、韓非は秦で囚われの身となって「說難」・「孤憤」を撰した。『詩経』の三百篇は、概ね賢人や聖人が憤懣を發して作られたものである。これらの人々は皆心中に鬱屈があつて、それぞれの正しいと思う道に通じなかつたのである。したがって往事を述べて、未來を思ふのである。」と。

彼が五十歳のとき、大赦にあつて出獄し、中書令となつた。『史記』執筆はいよいよ進み、五十五歳のときに、全百三十卷、五十二萬六千五百字が遂に完成した。彼の死は六十歳のときであつたとされる。

二、『史記』解題

◎『史記』の構成

『史記』は初め『太史公書』と呼ばれ、魏・晋のころ（二二〇ごろ～四二〇ごろ）から『史記』といわれるようになった。本紀・表・書・世家・列伝からなる。以下に目次を示す。

十二本紀 帝王を中心にし、上は黄帝より下は漢の武帝まで、二千五百余年の事柄を年月の順に記録した

卷一 五帝本紀第一

卷三 殷本紀第三

卷五 秦本紀第五

卷二 夏本紀第二

卷四 周本紀第四

卷六 秦始皇本紀第六

卷七 項羽本紀第七	卷九 呂后本紀第九	卷十一 孝景本紀第十一
卷八 高祖本紀第八	卷十 孝文本紀第十	卷十二 孝武本紀第十二

十表 時代別の年表・月表

卷十三 三代世表第一	卷十七 漢興以來諸侯王年表第五	卷二十一
卷十四 十二諸侯年表第二	卷十八 高祖功臣侯者年表第六	建元以來王子侯者年表第九
卷十五 六国年表第三	卷十九 惠景間侯者年表第七	卷二十二
卷十六 秦楚之際月表第四	卷二十 建元以來侯者年表第八	漢興以來將相名臣年表第十

八書 文化史・分野史とでもいうべきもの

卷二十三 礼書第一	卷二十五 律書第三	卷二十八 封禪書第六
卷二十四 樂書第二	卷二十六 曆書第四	卷二十九 河渠書第七
	卷二十七 天官書第五	卷三十 平準書第八

三十世家 周・漢の諸侯・諸王の主要なものについての事跡

卷三十一 吳太伯世家第一	卷四十一 越王句踐世家第十一	卷五十一 荊燕世家第二十一
卷三十二 齊太公世家第二	卷四十二 鄭世家第十二	卷五十二 齊悼惠王世家第二十二
卷三十三 魯周公世家第三	卷四十三 趙世家第十三	卷五十三 蕭相国世家第二十三
卷三十四 燕召公世家第四	卷四十四 魏世家第十四	卷五十四 曹相国世家第二十四
卷三十五 管蔡世家第五	卷四十五 韓世家第十五	卷五十五 留侯世家第二十五
卷三十六 陳杞世家第六	卷四十六 田敬仲完世家第十六	卷五十六 陳丞相世家第二十六
卷三十七 衛康叔世家第七	卷四十七 孔子世家第十七	卷五十七 絳侯周勃世家第二十七
卷三十八 宋微子世家第八	卷四十八 陳涉世家第十八	卷五十八 梁孝王世家第二十八
卷三十九 晋世家第九	卷四十九 外戚世家第十九	卷五十九 五宗世家第二十九
卷四十 楚世家第十	卷五十 楚元王世家第二十	卷六十 三王世家第三十

七十列伝 各時代に事績を遺した人物の伝記を中心とし、当時知られていた周辺国の紹介も含む

卷六十一 伯夷列傳第一	卷六十九 蘇秦列傳第九	卷七十七 魏公子列傳第十七
卷六十二 管晏列傳第二	卷七十 張儀列傳第十	卷七十八 春申君列傳第十八
卷六十三 老子韓非列傳第三	卷七十一 樗里子甘茂列傳第十一	卷七十九 范雎蔡沢列傳第十九
卷六十四 司馬穰苴列傳第四	卷七十二 穰侯列傳第十二	卷八十 樂毅列傳第二十
卷六十五 孫子呉起列傳第五	卷七十三 白起王翳列傳第十三	卷八十一 廉頗藺相如列傳第二十一
卷六十六 伍子胥列傳第六	卷七十四 孟子荀卿列傳第十四	卷八十二 田单列傳第二十二
卷六十七 仲尼弟子列傳第七	卷七十五 孟嘗君列傳第十五	卷八十三 魯仲連鄒陽列傳第二十三
卷六十八 商君列傳第八	卷七十六 平原君虞卿列傳第十六	卷八十四 屈原賈生列傳第二十四

卷八十五	呂不韋列傳第二十五	卷一百一	袁盎鼂錯列傳第四十一	卷一百一十七	司馬相如列傳第五十七
卷八十六	刺客列傳第二十六	卷一百二	張釈之馮唐列傳第四十二	卷一百一十八	淮南衡山列傳第五十八
卷八十七	李斯列傳第二十七	卷一百三	万石張叔列傳第四十三	卷一百一十九	循吏列傳第五十九
卷八十八	蒙恬列傳第二十八	卷一百四	田叔列傳第四十四	卷一百二十	汲鄭列傳第六十
卷八十九	張耳陳余列傳第二十九	卷一百五	扁鵲倉公列傳第四十五	卷一百二十一	儒林列傳第六十一
卷九十	魏豹彭越列傳第三十	卷一百六	呉王濞列傳第四十六	卷一百二十二	酷吏列傳第六十二
卷九十一	黥布列傳第三十一	卷一百七	魏其武安列傳第四十七	卷一百二十三	大宛列傳第六十三
卷九十二	淮陰侯列傳第三十二	卷一百八	韓長孺列傳第四十八	卷一百二十四 游俠列傳第六十四	
卷九十三	韓信盧綰列傳第三十三	卷一百九	李將軍列傳第四十九	卷一百二十五	佞幸列傳第六十五
卷九十四	田儼列傳第三十四	卷一百一十	匈奴列傳第五十	卷一百二十六	滑稽列傳第六十六
卷九十五	樊鄴滕灌列傳第三十五	卷一百一十一	衛將軍驃騎列傳第五十一	卷一百二十七	日者列傳第六十七
卷九十六	張丞相列傳第三十六	卷一百一十二	平津侯主父列傳第五十二	卷一百二十八	龜策列傳第六十八
卷九十七	酈生陸賈列傳第三十七	卷一百一十三	南越列傳第五十三	卷一百二十九	貨殖列傳第六十九
卷九十八	傅靳蒯成列傳第三十八	卷一百一十四	東越列傳第五十四	卷一百三十 太史公自序第七十	
卷九十九	劉敬叔孫通列傳第三十九	卷一百一十五	朝鮮列傳第五十五		
卷一百	季布欒布列傳第四十	卷一百一十六	西南夷列傳第五十六		

◎『史記』の特徴

きてんたい

紀伝体

しゅんじゅう

先行する『春秋』における「編年体」(年月の順に記述する方法)とは異なり、『史記』は本紀・列伝

という「紀伝体」という叙述形式をとった。この形式は中国正史の模範となった。天下を主宰した一族や個人の伝記を本紀とし、その時代の内で名を遺した個人の伝記を列伝として配すことで、事跡や事件ではなく、「人」を主体とした構成を『史記』は成し遂げた。一方で「編年体」の長所を取り入れた「表」や、制度や分野の変遷・発展を描いた「書」などによって、歴史を立体的に把握するために必要な視点が完備される。

全時代史・全世界史

先に示した目次に見られるように、列伝は周辺諸国をも含む構成をとる。つまり、『史記』は当時知り得る諸地域を網羅した、全世界史として描かれた。この外国伝を含む形は、後の正史にも引き継がれた。自国の全時代、そして全世界を視野に入れた『史記』は、その構成においても、文章においても、史学・文学上において優れた作品である。

三、游侠列伝

◎游侠とは

「游侠」の起源は、春秋末期にまで遡れるとされる。氏族制の崩壊によってあぶれた多くの浪人たちは、有力者たちに寄食した。庇護するものは、彼らを守ろうとし、庇護を受ける者は命を懸けてでも、恩に報いようとした。ここに所謂「游侠」の風が生まれたと考えられる。氏族・血縁の結びつきではなく、いわば「精神的な紐帯」によって他者と結びつくのが「遊侠」である。彼らは、一度承諾した約束事については、命を懸けてでも貫徹する誠実さと果敢な行動力を持つ。司馬遷はこの点を評価して列伝を立てたとも解釈できる。彼ら「遊侠」は、多く公的秩序に反する暴力を行ったが、それは時に政治的暴力と対立する場合もあった。政治的暴力と人間とを並べたときに、常に人間の側に立ち、人を描こうとした司馬遷にとっては、「游侠」についても列伝を立てる価値があると判断したのだろう。

司馬遷『史記』に続いた、班固『漢書』にも「遊侠列伝」は踏襲されたが、『史記』の描き方とは異なる。例えば、『史記』游侠列伝の中心である郭解について班固は、「誅罰してなお余りあり」と断ずる。人を描こうとした司馬遷と王朝に奉仕する御用史官の班固との相違が明確に看取される。以下に『史記』列伝の特徴を確認するため、「游侠列伝」を引用する。

◎游侠列伝読解

①韓子曰く、「儒は文を以て法を乱し、而して俠は武を以て禁を犯す。」と。二者、皆譏らる。而るに学士は多く世に称せらるると云ふ。術を以て宰相・卿・大夫を取り、其の世主を輔翼して、功・名俱に春秋に著るるが如きに至りては、固より言ふべき者無し。

韓非子は言った。「儒者は文辞を弄して法律を乱し、俠客は武力によって禁令を犯す。」と。両者はともに非難されているが、儒者の方は大抵世間で称賛されているようだ。学術によって宰相・大臣・家老の地位をものにして、時の君主を補佐して、功業・名声ともに歴史に書き遺されるなどというのは、もちろん文句のつけようはない。

②季次・原憲の若きに及んでは、閭巷の人なり。讀書して独行君子の徳を懷き、義苟も当世に合はず、当世も亦たこれを笑ふ。故に季次・原憲、身を終ふるまで空室蓬戸、褐衣疏食して厭かず、死して已に四百余年、而も弟子はこれを志して倦まず。

季次・原憲などになると、民間の人である。書物を読み、ひとり我が道を行く立派な人物としての徳を備え、信条として世間といい加減に妥協せず、世間からも笑いにされた。したがって季次や原憲は、死ぬまでガランとした何もないあばら家に住み、粗末な衣類や食事にさえ事欠き、死んでからもう四百年あまりになるのに、弟子たちは彼らのことを飽くことなく書き伝えてきた。

③今游侠は其の行ひ正義に軌せずと雖も、然れども其の言は必ず信あり、其の行ひは必ず果たし、已に諾すれば必ず誠あり、其の軀を愛します、士の阨困に赴き、既に已に存亡死生し、而も其の能を矜らず、其の徳を伐るを羞づ。蓋し亦た多とするに足る者あり。

さて游侠は、その行動が正義の道に合わないけれども、自身の発言は必ず守り、自身の行動は必ず遂行し、承諾すれば必ず誠実を込めて、我が身を惜しまず、他人の災難に駆けつけ、身を生死の境に置きながら、自身の能力をほこらず、自身の恩徳を鼻にかけるのを恥じる。思うに彼ら游侠にもまた十分賞賛すべき点がある。

④誠し郷曲の俠をして、季次・原憲と権を比べ力を量り、功を当世に效さしめんか、日を同じうして論ぜず。要するに、功見はれ、言信あるを以てすれば、俠客の義、又曷ぞ少くべけんや。

…もしも巷間の俠客が、季次・原憲とその勢力や能力を比べ合って、その時代にどんな貢献を果たしたかによって価値を決めるならばとても同列に考えることはできない。(游侠の方がはるかに勝る。)要するに、功績がはつきりしていて、言動が一致している点で、俠客の信義は、どうして欠いてよいものだろうか。(存在価値があるだろう。)

⑤閭巷の俠の如きに至りては、行ひを修め名を砥き、声天下に施き、賢と称せられざるなし。是れ難しと為すのみ。然れども儒・墨は、皆排擯して載せず。秦より以前は、匹夫の俠、湮滅して見れず。余、甚だ之れを恨む。

…市井の俠客などになると、修行して名を揚げ、評判は天下にとどろき、誰もが賢明さを称える、これこそは難しいことだ。ところが、儒家や墨家の学者たちは、皆彼ら俠客を排斥して書物にのせない。秦より以前は、庶民の俠客たちは埋没している。私はこのことが大変無念なのである。

以上、総論部分から要点を抽出して、司馬遷の游侠論を追ってきた。これに朱家・田仲・王公・劇孟・郭解の伝記が続く。このうち、最も文量も多く、本列伝のまとめにも関わる郭解の伝記について、要点を確認していく。なお、郭解は司馬遷と同時代の人である。

⑥郭解は軹しの人なり。字は翁伯あやな おうはく。…解の父、任侠を以て、孝文の時に誅せられて死す。解、人となり短小精悍せいかんにして、酒を飲まず。

郭解は軹の人である。字は翁伯。…解の父は任侠のゆえに、文帝（在位前一八〇～前一五七）のときに刑死した。解は生まれつき小柄で精悍な男で、酒を飲まない。

⑦…解の姉の子、解の執いさおを負み、人と飲みて、之れに嚙はさしめ、其の任に非ざるに、強いて必ず之れに灌ぐ。人怒り、刀を抜きて解の姉の子を刺殺し、亡れ去る。…解、人をして賊の処を微かに知らしむ。賊、窘きずりて自ら帰し、具さに実を以て解に告ぐ。解曰く、「公の之れを殺せしは、固より当なり。吾が見直なおからず。」と。…諸公之れを聞き、皆解の義を多とし、益ます附く。

…解の姉の子が、解の権勢をかさにきて、人と酒を飲んだときに杯をほさせ、相手がゆけぬ口なのに、あくまで無理に流し込ませた。相手が怒り、刀を抜いて解の姉の子を刺し殺して、逃げ去った。…解は人に命じて犯人の所在をそとつきとめさせた。追い詰められた犯人が自分から名乗り出てきて、解に実情を詳しく打ち明けた。解は言った。「お前さんがあれを殺したのは、こりやもつとむだ。うちの子が間違っていました。」と。…これを聞いたお偉方は、みな解の義侠心を称え、ますます慕い寄った。

他所の土地で揉めた者同士の仲裁に、その土地の顔役が何十人も間に入ったが、相手はてんで言うことを聞かない。そこでその男が仲裁を求めに郭解に会いに来た。解が夜分に仇の男に会うと、仇の男は解の言うことなら聞くと言った。解は次のように言い残して、夜のうちに引き上げた。

⑧…解、奈何いかんぞ乃ち他県より人の邑中の賢大夫の権を奪はんや。

…よそ様のお偉方たちのお株を奪うようなことは、この解にはできませんのでな。

郭解は各地の有力者から敬意を払われ、市井に勢力を築いた。しかし当局からはやかまれた。その結果、武帝の地方豪族移住策における対象者とされた。本来郭解の財産は少ないため、移住者の規定に当たらないにもかかわらず、茂陵もりやうの地へと移住させられた。郭解を移住者の名簿に入れた役人を解の兄が殺し、その役人の父親を解を慕う何者かが殺した。解は逃亡したが、これらの殺人事件の黒幕として捉えられた。しかし、解の犯した殺人は、すべて恩赦以前のことであった。

⑨…軹に儒生あり、使者の坐に待す。客、郭解を譽む。生曰く、「郭解、専ら姦を以て公法を犯す。何ぞ賢と謂はんや。」と。解の客聞き、此の生を殺し、其の舌を断つ。吏、此れを以て解を責む。解、実は殺しし者を知らず。殺しし者も亦た竟に絶ち、誰たるかを知るなし。吏、解の罪なきを奏す。御史大夫公孫弘、議して曰く、「解、布衣にして任侠を為し権を行ひ、睚眦を以て人を殺す。解、知らずと雖も、此の罪、解の之れを殺すより甚だし。大逆無道に当たる。」と。遂に郭解翁伯を族す。

…郭解の出身地である軹に儒者がいて、取り調べに派遣された使者の座にひかえていた。あるよそ者が郭解をほめた。儒者が言った。「郭解は悪事ばかりやって、おかみの法を犯す。それがどうして立派な男なのか。」と。これを聞いた郭解の食客が、この儒者を殺して、彼の舌を断ち切った。役人はこの件で郭解を責めた。解は実は儒者を殺した男を知らない。殺した男も結局行方をくらまし、誰であるか知る者もない。役人は解の無罪を上奏した。御史大夫の公孫弘は判決について意見を述べた。「解は庶民でありながら、任侠によって権勢をふるい、ささいな怨みから人を殺した。解が知らなくても、この度の犯罪は、解自身が殺したよりもひどいものだ。大逆無道の大罪に相当する。」と。かくて郭解翁伯の一族を皆殺しにした。

司馬遷は郭解以後の状況について次のように述べる。

⑩是れより後、俠を為す者極めて衆きも、敖りて数うるに足る者無し。

これ以後、任侠の行為をなす者は馬鹿に多いが、傲慢で、取り立てて言うほどの人物はいない。

以下が游侠列伝の総括に当たる部分である。

⑪太史公曰く、吾、郭解を視るに、状貌は中人に及ばず、言語は採るに足らざる者なり。然れども天下、賢と不肖と、知ると知らざるとなく、皆其の声を慕ひ、俠を言ふ者、皆引きて以て名と為す。諺に曰く、「人、栄名を貌とせば、豈に既くるあらんや。」と。於戯、惜しいかな。

太史公のことば―私は郭解を見たことがあるが、風貌は並みの人間にも及ばないし、話すことばも取るに足りないものだった。ところが、世間では、賢者も愚者も、また知る者知らぬ者も、みな彼の名声を慕い、俠客を語る者は、みな彼をあげて代表とする。諺にいう、「人は名声を顔とすることができれば、決して滅びることはない。」と。ああ、惜しいことよ！

四、まとめにかえて

「太史公自序」には、本資料3ページの引用箇所が続いて、各巻を執筆した理由が簡潔に示される。「游侠列伝」への司馬遷の言説を確認して、まとめにかえたい。

人を^たより救ひ、人の^{すく}膽らざるを振ふ、仁なる者有らんか。信を^{うしな}既はず、言に^{そむ}倍かず、
^{おし}義者も取る有り。游侠列伝第六十四を作る。

他人を困苦から救い、他人の貧窮を救うという游侠の行為は、仁の心あつてのことであろう。信義を失わず、約束を必ず実行するという態度は、義人も称賛するところである。そこで、「游侠の列伝」第六十四を作った。

◎既存の価値観への疑義 例 天道是邪非邪 天道是か非か「伯夷列伝第一」

◎事実の記録ではなく「人」を描く 歴史的価値のみならず文学的価値が現れる

『史記』が出典の言葉(ごく一部)

臥薪嘗胆「越王句踐世家第十一」

完璧「廉頗藺相如列伝第二十一」

狼藉「滑稽列伝第六十六」

満を持す「絳侯周勃世家第二十七」

逆鱗「老子韓非列伝第三」

背水の陣「淮陰侯列伝第三十二」

四面楚歌「項羽本紀第七」

酒池肉林「殷本紀第三」

蛇足「楚世家第十」

禍いを転じて福となす「蘇秦列伝第九」

読書案内

『司馬遷』(武田泰淳・中公文庫・二〇二二年九月)

『孔子全書 第十一巻 史記(1)』(吹野安・石本道明／明德出版社／二〇〇七年六月)

『新訂中国古典選 第十一巻 史記 楚漢篇』(田中謙二・一海知義／朝日新聞社／一九六七年)

『史記の再発見』(藤田勝久／汲古書院／二〇二三年五月)

『史記列伝』(1)～(5)(小川環樹他／岩波文庫／一九七五年十二月)

『漢文の読法 史記 游侠列伝』(齋藤希史・田ロー郎／KADOKAWA／二〇二四年三月)

『『史記』小事典』(久米旺生他／徳間文庫／二〇〇六年五月)

『史記』版本の画像は、宋版史記(黄善夫刊本)【国宝】、国立歴史民俗博物館所蔵など、データベースにて画像が公開されているものがいくつかある。(https://khirin-a.rekihaku.ac.jp/database/sohanshiki)